



統計の日制定を喜ぶ

県統計課長 青木正寿

今さら云々するまでもないが、統計の生命は正確ということにある。この正確な統計が生まれるか否かは一にかかって国民一人一人の協力と、これら統計にたずさわる関係者、特に第一線において日夜調査に献身的に努力されている統計調査員の双肩にかかっているのである。

国においては、本年度において、前記統計に対する国民の関心と理解をより深めるとともに、統計関係者の志気を高揚するため「統計の日」を制定（この稿が発表されるころには閣議諒解のかたちで決定されるものと思われる。）されるとのことであるが、私は、統計にたずさわる者として、また国民一人として、この制度がおそきに過ぎたとはいえず、とにかく心から賛意を表するとともに喜びに堪えないところである。

「統計の日」制定の案をそく聞いた私は、いち早く読売新聞の気流欄に投稿（別掲のとおり）し、制定の一日も早からんことを念じたのである。

さて、この「統計の日」を最も有意義なものとするためには、どのようなことを実施すればよいだろうか。この日を前後して、月間なり週間なりのかたちで国も県も市町村も、あるいはまた民間団体等においも、各種の行事、たとえば、統計大会、統計功労者の表彰、講演会、座談会、統計グラフや標語・ポスターの募集等が計画されることと思われるが、私は、さらにこれらの行事のほか、この月間なり週間なりには、統計関係各種機械器具および事務用品等の、全国的な値引き実施の運動を展開し、実利面からの広報を提唱したい。

もちろん「統計の日」を中心として行なわれるであろう各種の行事をとおしての、統計思想の普及については、新聞、テレビ等のマスコミへの強力な協力を呼びかけるとともに、小・中・高校等を通じて各家庭への浸透をはかることは、いわずもがなである。

ともあれ統計関係者にとって長い間の懸案であった「統計の日」が制度されるのであるから、国民の立場に立って、関係者が英知を集め「統計の日」にふさわしい各種の行事を、国も地方公共団体もまた民間団体もともに協力して実施し、「統計の日」をより意義あらしめ、国民ひとしく統計を重んじ正しい統計が生まれ、国ますます栄えることを乞い願うものである。

— 読売新聞「気流」欄に登載 —

47.9.8

「統計の日」制定に大賛成

地方公務員・青木正寿

行政管理庁は、来年度の重点施策として統計知識の普及を図るため「統計の日」を制定する由であるが、まことに時宜を得たものと心から賛意を表するものである。

国が行なう指定統計調査（たとえば国勢調査、事業所調査など）にせよ、都道府県が行なう調査（たとえば茨城県の場合は、農業基本調査、常住人口調査など）にせよ、この調査結果は、国の施策や県、市町村の各種の行政施策を立てる基礎資料として極めて重要な役割を果たしているが、調査の数があまりに多いため、調査の対象となる企業や住民からはとかく敬遠されがちなのが実情

である。

田中総理は、新々早々「物事は数字が一番正確」と統計の重要化を強調されているが、その正確な統計数字が生まれるか否かは、調査に対する国民一人一人の協力いかによるものであるから、この際大英断をもって「統計の日」を制定し、統計に対する国民の協力をより一層深めるべきである。

「統計の日」は、わが国ではじめて国勢調査が行なわれた大正9年10月1日を記念して10月1日とすべきである。（水戸市）